
ねがい (ボーボボのファンフィクション)

y

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねがい（ボーボボのファンフィクション）

【Nコード】

N0733G

【作者名】

y

【あらすじ】

大切な少女の誕生日でもあるクリスマス・イヴ。仲間達は少女の為にパーティーを開く準備をする。一人離れた森で待っているビュティを迎えに行ったボーボボは彼女の無残な姿を目にする

（前書き）

集英社「ボボボーボ・ボーボボ」のファンフィクションです。関係者様・関係団体とは一切の関係はありません

ありえない

今夜は聖なる夜で、それよりももっとも大切なお前の誕生日で

こんなことはありえない

借り上げたペンションで、皆でパーティの準備をして喜ばせようと驚かせようと綺麗な夜空の下、少し離れた森で待ってると

絶対にありえねえことなんだ

全ての準備が整って、上機嫌でお前を迎えに行った俺が見たのは

「ありがとう」と喜ぶ笑顔は見えず

いやそれよりも顔自体が見えない

冷たい地につつ伏せに倒れているお前

赤黒い、色

柔らかい桜色で構成されてるお前にありえない暗い、停滞した色がその下腹部を覆って

お前は身動き一つしなかった

「……おい……どうした？」

その物体に声を掛ける。震えが止まらねえ

「寒いだろ……そんな所で寝ちまつたら……」

膝について震える手で後頭部――桜色に触れる

「なあ・・・待たせて悪かった・・・よ・・・怒ってんのか？寒かったんだろ？パーティもう準備出来てるしよ・・・あつたけえ食いモンたくさん用意したんだ・・・すぐ食っていいぜ・・・なあ・・・」

桜色は動かない

「プレゼントだってよ・・・皆ですつげえ悩んで二三人ブチのめして俺が決めたんだ・・・きつと喜んでくれるってよ・・・お前がアリガトウって笑ってくれると思ってな・・・ヘンなモンじゃねえよ？ちゃんんと女の子が喜びそうな・・・ネットでちゃんと検索して店のヤツにも聞いて・・・」

沈黙

「・・・だから早く起きろってんだ！」

その小さな体をすくい上げるように抱き上げた

重い

何度も肩に抱え上げて笑っていた華奢な体はもつともつと軽かった筈だ。体重を感じさせない程に小鳥のように軽かったーそれが今この重さはなんだ？細い腕がだらりと垂れる。生の脈動を喪失した重い物体

「・・・バカ・・・な・・・」

魂という重力に立ち向かう力を喪失した肉体はこれ程までに重いのか？

短時間だからー大丈夫だと思っていた

誰か一人ー護衛でも見張りでもつけさせるべきだったが皆彼女の笑顔を迎える準備に夢中で気が向かなかった

俺、一人だけでも

誰一人信頼出来ない自分こそ冷静になるべきだった

命のやり取りをする闘いの旅に出ている中で

たった一人無力な少女

自らを守れない、柔らかく優しい少女

自分達をその柔らかい強さで何度も救ってくれた、美しい少女

いつかこんな日が来ることも　きつときつときつと分かっていた

ならば何故彼女を傍に置いた？

彼女を大切に想うのならば連れて行くべきじゃなかったんだ

いつか彼女がこのような重い物体になることを予想出来ない筈じゃないだろう？

「――目を・・・覚ませ・・・頼む、から・・・」

木々の間から夜空を見上げる。物体を抱き締め力無く膝ま付いた巨体は無数の星が出ている夜空を見上げて願う

「今夜は・・・願いを叶えてくれるんだろー！ たった一つ！」

男は夜空に向かって怒号のような声を上げるー！

「俺の命と引き換えだって構わねえ！ 頼むー！ 頼むからこの子を戻してくれ！ あの軽く温かい体に戻してくれ！ 頼むー！ ！」

聴こえない頑張れを何度もくれた　おまえ

いや、俺には聴こえてた

俺のゴツイ拳に何度も、何度も　そつと　そつと

その小さな無力な手で

ガンバレ　と

俺にとってそれは　救い

絶対的に俺は救われたんだ。だから今度は俺がお前を救う

何でもいい。俺にならどんなモンが待ってようが構わねえから

この子を

「どうしたのー？」

目の前に、桜色

「眠ってるのー？サングラスだからわかんないなあ・・・」

少々困ったような笑顔と、軽やかな声

「皆もう收拾つかないよー！ケーキ投げ合いっこしちゃって！止めるの手伝ってよ！」

少女は赤いサンタクロースの格好だ。そうだ、先程パーティー会場で彼女は皆にプレゼントを配ってくれていた。サンタクロースの格好をしてくれて。一人一人に、好みの物をきつと一生懸命選んでくれたんだろう。皆彼女のとびきりの笑顔が見たくてパーティを始めたのに自分達の方がとびきりの笑顔になってしまったー照れ隠しの、ケーキの投げ合いっこ

「・・・きゃっ？」

その小さなサンタクロースを抱き上げた

「なにになに？！どーしたんだよフザケてー？」

可愛らしく怒ってーその体を強く抱き締めた俺に少女は驚いたようだった

「・・・軽い、なーお前。あつたけえし・・・」

どうしたの？といつもと様子が違うような俺に、心配そうに覗き込んでくる蒼い瞳

生の脈動

「・・・サンタクロースさん、俺の願いも叶えてくれっか？」

少女の小さな頭を包んで、俺は何か感謝する

サンタクロースに？

聖なる夜に？

――桜色の少女に

「・・・え？うん。寝てたからまだプレゼントあげてなかったよね」
少女の承諾

「桜色のサンタさん、くれや」

彼女が一個の重い物体になった 悪夢？

いつか彼女と別れる日が来るのだろう

だがそれは決して先程のようなものではない
あつてたまるか

それは、時間、状況、そして他の男によって

それは覚悟している

彼女が幸せならば それでいいんだ

そういう日が来る

いつか きつときつときつと

それでも今はこのままで

温かさを 手の中に

俺の願いを叶えてくれたサンタクロース

ありがとな

(後書き)

読んで下さってありがとうございました
イラストや漫画をサイトに載せています

<http://biobio.nekonikoban.org/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0733g/>

ねがい（ボーボボのファンフィクション）

2010年10月15日22時22分発行